大学院健康科学研究科がん看護学研究室が「東海大学がん看護・緩和ケア研究会」を開催しました

2016 年 5 月 21 日

大学院健康科学研究科がん看護学研究室が 5 月 21 日に伊勢原キャンパスで「東海大学がん看護・緩和ケア研究会」を開催しました。この研究会は、複雑な問題をもつがん患者とその家族をサポートするがん看護専門看護師の育成や、看護師や保健師あるいは他職種が現場でがん看護の実践力を高めることを目的として、毎年隔月で実施しているものです。がん看護専門看護師は、日本看護協会の認定資格で、患者や家族のみならず、組織全体のがん看護の質を改善するスキルを備えたリソースです。日本では最も早く専門看護師の資格認定が開始され、専門看護師では最も人数が多い領域です。本学のがん看護専門看護師教育課程は、2012 年度にスタートして間もないです。当日は、本研究室の修了生でがん看護専門看護師として活躍している、大塚敦子氏（東海大学医学部付属病院）他をファシリテーターに招いて事例検討を行いました。

今回は、進行がんの診断と同時に治療適応なしと告知をされ、セカンドオピニオンでの厳しい説明を経て、多数の苦痛症状を抱えるがん患者とその家族が、「それでも治療を受けたい。」と、希望を強く語る場合の最善の介入について検討しました。Mishel の不確かさ理論と事例紹介を、修士 2 年生でがん看護専門看護師候補生の坂口紀子氏より説明がなされ、参加した看護師と共に理論に沿った分析を進めました。

病院看護師からは、「日常の業務では理論を用いて実践を振り返る機会がなく、理論的思考の重要性を再認識しました」との感想が聞かれました。在校生からは、「理論を基に参加者たちと意見交換することで、俯瞰して事例を捉える力がつくと実感し入学前から 2 年間継続して参加しています。」、「がん看護専門看護師として、がん患者や家族だけでなく、スタッフ看護師や医師を含めて高度な知識やスキルを駆使して関わる責務を改めて実感できました」とコメント。本研究室で大学院生を指導している庄村雅子准教授は、「がん看護専門看護師は、患者と家族の生活の質を高め、関わる職種や地域と連携し、組織の看護の質を高める重要な役割を担っています。この研究会に参加することで、患者と家族の課題を分析する力を身につけ、スタッフや組織のがん看護の質を高めるようになってくれればと願っています」と話しています。